

曹操高陵・洛陽西朱村曹魏墓出土石牌の性格

森下章司

河南省西高穴村二号墓および洛陽西朱村一号曹魏墓からは、副葬器物の名称を記した石牌が多数出土し、漢末～魏代の墓制や物質文化を示す資料として注目されている。前者出土石牌には「魏武王常所用」と記したものがあり、同墓を「曹操高陵」と比定する上で大きな役割を果たした。後者は近刊の『流眇洛川』にその全容が紹介されたが、総数 300 点以上に及び、内容も豊富である。前漢墓に比べ、薄葬の進行や盗掘の害などによって不明な点が多い後漢～魏晉墓の副葬器物や墓制の実態を知るうえで貴重な手がかりとなる。

京都大学人文科学研究所・「3 世紀の東アジア」共同研究班では、これらの石牌資料の積読を進め、文献や出土資料との照合など基礎的な検討をおこなってきた。その結果、それぞれの副葬器物の品目や特色、さらに両墓間での共通性や相違点も明らかとなってきた。一方で石牌の具体的な使用法など不明な点も多い。西朱村一号墓については特殊な埋葬を想定する説（魏明帝の夭折した娘である曹淑と甄黄の冥婚墓）も提出されており、墓葬資料として活用するためには、石牌の性格を十分考慮しておく必要がある。

本発表では上記の検討結果に基づいて、石牌資料全体の概要、品目や表記法の特色、問題点についてまとめる。また墓の構造や葬送儀礼に関わる器物名を記した石牌を取り上げ、その意義を論ずる。石牌という新資料を活用して、魏晉変革期における墓制・葬制の実態について検討をおこないたい。